「海事社会に着目した課題」　課題研究グループ（第１回会合報告）

リーダー：篠原正人

2018 年度　課題テーマ：「わが国海運を支える海技のあり方と制度改革」

第１回会合記録

開催日：2018 年 3 月 19 日

場所　：内海水先区水先人会事務所

参加者：出席 7 名、　欠席 8 名

問題提起

- 最近の外国人配乗増により、日本の海技の伝承が途絶えている。
- 日本の海技とは何かを明確化して、その中で価値あるものを世界標準に加えられないか。
- 過去の調査結果として、日本の海技の特徴は以下の点が挙げられた。
- ①先輩が後輩を教育・育成する、②情報の共有に努める、③職務への責任感と後任者への配慮、④海陸の職場交流が視野を広くすることに貢献、⑤高度な知識経験により技術革新への貢献、⑥高度な知識経験をもとにした国家プロジェクトへ貢献。
- 日本人海技者数が思うように回復しないため、今後の課題として上記の特徴を外国人海技者に伝承・移譲できないか。

メンバーの自由発言

- 日本船においても事故が多い。OJT/OFF-JT にも限界が感じられる。海技力なくても安全運航できる船を造る。その過程で日本スタンダードが構築できれば良い。
- 欧米主導の国際標準に従うばかりでなく、欧米が納得する日本発の世界標準/基準を。そのために、東アジア、ASEAN、インド地域までの協働体制構築を。
- 内航の船員不足は深刻であり、そのレベル低下も顕著である。内航は荷役作業もあり船員の負担など大きく労働環境もネックに。「内航海運の活性化に向けた方向性検討会」を設置し「内航未来創造プラン」が公表された。一社）海洋共育センターの活動で効果が出ているが、資金不足と諸規制の障害あり。
- 西洋の船では高級船員と下級船員の格差が大きく、部下を教育・育成しようという意識はない。他方、日本人船員は外国人船員を一から育てて戦力化してきた。
- 日本人船員でも、後輩を育てるという意識が減退してしまっている。
- 保険の観点から事故率を減らす考え方をもっと導入すべき。事故率を数値化して質の改善につなげる措置を。大手製造業と保険会社の協力要請が必要。
- 自律船の開発が進んでいるが、Watch をどうするか、海域・港域の特殊性にどう対応するか、まだ課題は多い。
- 安全と経済の二律背反が大きな課題である。
- 旗国のコントロールが徹底していないことが大きな問題。

まとめ及び今後の予定

第１回は出席者も少なく、且つテーマを絞らず自由に思うところを発言してもらった。メンバーの共通する思いとしては、日本の海技に価値ある特徴があり、それが外国人船員に伝承できていないという点であった。今後、回を重ねるごとに議論を煮詰め、海技のあり方と制度改革の必要性を見出す。

第 2 回会合は 4 月 19 日（木）15:00 より同事務所で開催。